

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：23401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380745

研究課題名(和文) デジタルメディアを活用した多文化ソーシャルワーク実践モデルの構築

研究課題名(英文) Multicultural social work practice through digital media

研究代表者

舟木 紳介 (Funaki, Shinsuke)

福井県立大学・看護福祉学部・講師

研究者番号：50315842

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：オーストラリアにおけるデジタルメディアを活用した外国にルーツを持つ若者や障害者への支援活動の先進的事例に関するインタビュー調査の分析を踏まえて、外国籍若者や女性らが参加するデジタルメディア・ワークショップをオーストラリアのコミュニティ・アーティストや福井県内のソーシャルワーカーらと共同で実施した。特にデジタル・ストーリーテリング(DST)の当事者による制作を通じて、当事者の自己肯定感が向上することがわかった。さらに上映会を通じて、社会的なマイノリティ当事者(外国人や知的障害者など)の暮らしや生活困難に対する理解が深まり、当事者とのつながりの構築へ効果があったことがわかった。

研究成果の概要(英文)：This study attempted to analyse the effectiveness of community arts through digital media production to promote social and community well-being of social minority communities such as migrants or people with disability. Through digital storytelling workshops with migrant youth and people with disability, in cooperation with artists in Australia and social workers in Fukui, Japan, participants could promote self-esteem and create community engagements with people in the community through showcase events for self-help groups and university students.

研究分野：ソーシャルワーク

キーワード：移民 オーストラリア デジタルメディア デジタルストーリーテリング

1. 研究開始当初の背景

1980年代以降、我が国で増加するニューカマーと呼ばれるアジア諸国や南米からの外国人の半数は永住者や日本人の配偶者であり、「生活者」として滞在の長期化、定住化が進み、外国にルーツを持つ子どもや女性も増加している。その後も、国際的な越境移動と定住者は増加し、グローバル化の流れは地方都市に置いても顕在化している。特に外国人と日本人住民との日常的な「多文化共生」の問題は、地域コミュニティの中で継続的に発生している(石河 2012)。

しかし、社会資源の不十分な地方都市の滞日外国人は、言語的文化的バリアによって地域コミュニティとの交流の機会が制限されている。外国人の日常生活基盤としてのメディアやICT(情報通信技術)利用度の高さが示されている一方で、日本社会におけるメディアは外国人住民の文化的市民権を保障するような多言語化・多文化化は進んでいない。外国人住民当事者も主流メディアでは外国人住民のようなマイノリティが自らの声を発信、共有する機会は制限されていると感じている(岩淵 2011)。一方、外国にルーツを持つ若者は、日本語をベースにしたメディアやICTの活用について親の世代と比較すれば大きな問題がない場合が多い。しかし外国にルーツを持つ若者にとって社会的経済的な様々な生活問題のみならず、文化的なアイデンティティを中心とする社会的な承認の問題は、第1世代の外国人の親とのつながり、地域コミュニティとのつながりに大きな影響を与えている(Funaki 2011)。

本研究が目指すオーストラリアでは、1970年代より多文化主義の下で多言語化、多民族化が進み、近年移民と主流オーストラリア人との日常的な衝突が発生し、若い世代の移民・難民の社会的疎外が社会問題となっている(塩原 2010)。そこで、移民や難民の若者とその家族や地域コミュニティとのつながり(エンゲージメント)の再構築および社会関係資本の創出を目的として、移民コミュニティ自身がアーティストや社会福祉専門職の支援の下、デジタルメディア作品を創出するコミュニティ・アートおよび文化開発プロジェクトが各都市(シドニー、メルボルンなど)で実践され、移民定住支援に効果を表している(Dreher 2010; Funaki 2011)。特に当事者の語りやデジタル作品とするデジタル・ストーリーテリング(以下、DST)は、移民・難民のみならず、高齢者、障害者、女性といった社会的に孤立しやすいマイノリティに声を上げる機会を与え、疎外されがちであった地域コミュニティとのエンゲージメントの再構築に効果があるとされている(Hartley and McWilliam 2009)。さらにDST実践においては、外国人支援分野のみならず、障害者の地域生活支援分野においても障害者当事者の社会参加や社会包摂に効果があることがオーストラリアや日本において先

進事例があることが分かった。

2. 研究の目的

本研究者は、福井県内のソーシャルワーカー、オーストラリアのコミュニティ・アーティストを共同研究者、研究協力者として迎え、海外にルーツを持つ若者や女性および知的障害者当事者が参加するデジタルメディアワークショップにおけるコミュニティ形成のプロセスと地域コミュニティでの住民意識の形成の効果について、調査・分析し、デジタルメディアを活用した新たな多文化ソーシャルワーク実践モデルを構築することを目的として本研究を実施した。

3. 研究の方法

平成25年度(2013)は、文献調査に加えて、2013年4月および9月にオーストラリア・シドニーにおいてデジタルメディアを活用した外国にルーツを持つ若者や障害者への支援活動の先進的事例に関するインタビュー調査を連携研究者(塩原氏、濱野氏)らと実施し、デジタルメディア制作ワークショップの実践の課題や作品公開の方法等についてフィールド調査および聞き取りを実施した。2013年8月から2014年3月まで、越前市国際交流協会との共催で、国内研究協力者とともに、海外にルーツを持つ若者による主体的な映像メディア制作を目的とした「外国人若者のための日本語パソコン学習会」を合計11回実施した。主にフィリピン、中国からの海外にルーツを持つ若者と月1回のペースで越前市においてワークショップ形式で実施し、参加者に対するインタビュー調査を実施した。

平成26年度(2014)は、2014年7月にオーストラリア・シドニーにおいてデジタルメディアを活用した外国にルーツを持つ若者や障害者への支援活動の先進的事例に関するインタビュー調査の継続調査を実施した。2014年9月には、我が国におけるDST実践研究の第一人者である小川明子先生(名古屋大学)、土屋祐子先生(広島経済大学)を福井県へ招聘し、ファシリテーター養成を目的とした「支援者のためのDSTワークショップ」を実施し、その成果を元に、2015年1月には、越前市国際交流協会の協力で、海外にルーツを持つ支援者による主体的な映像メディア制作を目的とした「外国人支援者のためのDSTワークショップ」を実施し、参加者へのインタビュー調査・分析および参与観察を行った。

平成27年度(2015)は、これまでの研究成果の総括のために、オーストラリアでの追加事例調査に加えて、国内外の研究者や実践者との研究交流を通じて、新たな多文化ソーシャルワークの実践モデルを開発に向けた取り組みを行った。これまで3年間で制作してきた主にDST作品を福祉や教育に関わる実践者や社会福祉を学ぶ大学生に公開する上映

会を開催し、作品についての印象やデジタル作品の活用の意義に関するアンケート調査を実施し、その効果を検証した。

4. 研究成果

平成 25 年度(2013)は、オーストラリアでの文献調査及び事例調査の分析や、海外にルーツを持つ若者による主体的な映像メディア制作を目的とした「外国人若者のための日本語パソコン学習会」を実施した。内容は、福井県内のソーシャルワーカー、外国人支援者の協力を得て、iPad を使った大学生との交流、越前市文化財や福井市歴史博物館への訪問と DST 制作であった。また、同時期に、知的障害を持つ当事者や知的障害者支援分野の実践者を対象として、DST 制作ワークショップを開催し、知的障害者（主に自閉症スペクトラム）の地域生活支援分野においてもデジタルメディア実践を応用する取り組みを行った。

本研究ではワークショップ参加者に対するインタビュー調査および参与観察の結果を分析した。移民定住支援における映像制作の活用では、1)単にデジタルメディアの技術を提供するプロセスでは不十分であること、2)社会福祉士等の生活支援に関わる支援者の協力を得て、外国人若者および家族の地域生活におけるニーズの状況を把握し、実施形式を柔軟に対応する必要性があること、3)デジタルメディア(iPad などのタブレット端末)の活用を通じて表現された地域生活ニーズ(学習、就職、人間関係等)にどのように対応していくかという連携の意義の3点が確認された。また、データの共有および討議の手段として、SNS Facebook の非公開グループ作成機能を活用し、参加メンバー限定の仮想コミュニティを立ち上げた。

平成 26 年度(2014)は、国内先進事例の調査として、2014 年 5 月に「第 12 回市民メディア全国交流会 三河メディアフェス 2014」に参加し、日本国内で DST を障害者や外国人若者といった社会的マイノリティへのメディア実践で活用している研究者から、福井での海外にルーツを持つ若者を対象とした「ダイバーシティデジタルメディア(DDM)プロジェクト」への助言を得ることができた。2014 年 8 月には、大学生および研究協力者(ソーシャルワーカー)1 名に対して、映像アーティストを招聘し、デジタルメディア研修を実施し、基本的なデジタルメディア技術(カメラ、ビデオ撮影、インタビュー撮影等)の取得のトレーニングを実施した。

そして 11 月に国際シンポジウム「デジタル・ストーリーテリングの可能性—つながりを構築するメディア実践の未来」に参加し、イギリスの DST メディア実践の第一人者であるカレン・ルイス氏(英国サウス・ウェールズ大学)や下村健一氏(慶応義塾大学)に続いて、代表研究者舟木がダイバーシティデジタルメディア・プロジェクトについて報告し

た。

2015 年 1 月に実施した「外国人支援者のための DST ワークショップ」では外国人参加者へのインタビュー調査を実施し、ワークショップ参加者が、自らの語りをデジタル化し、共同作業の中で他者の語りを聴くことを通じて自己覚知を行うと同時に、それぞれの支援の現場でファシリテーターとしてデジタルメディアを活用する技術を取得できたことが検証できた。ソーシャルワーク実践における DST の活用の課題としては、簡潔に完全に結論付けるようなストーリーを基本とする西欧的な DST が「非西欧」社会である日本における実践では地域社会において受容されない可能性があるという倫理的な課題が明らかになった。

平成 27 年度(2015)に実施した DST 上映会参加者へのアンケート調査結果から、DST 作品を鑑賞した参加者らは、上映会を通じて、作品を制作した社会的なマイノリティ当事者(外国人や知的障害者など)の暮らしや考えていることに対する理解が深まり、当事者とのつながりの構築へ効果があったことがわかった。

また、オーストラリア訪問調査により明らかになった重要な点の 1 つが、デジタルメディアを活用したコミュニティアート・文化開発とソーシャルワークの協働実践の可能性である。オーストラリアのコミュニティアート・文化開発は、アーティストやコミュニティ住民らが、アートやデジタルメディアを使って自己表現し、個人や集団の文化的能力を高めると同時に社会変革をめざす実践であり、人権や社会正義を基盤として社会変革をめざすソーシャルワークのグローバル定義と理念的に大きな重なりがあることが分かった。このグローバル定義は、2014 年 7 月に 14 年振りに国際ソーシャルワーカー連盟によって改定されたものであり、特徴として 2 点が挙げられる。1 点目は、ソーシャルワーカーが主導する個人への援助が定義から削除され、社会的なマイノリティ当事者による社会変革、社会開発、エンパワメントをソーシャルワーカーが側面的に支援する意義が強調されたことである。2 点目は、ソーシャルワークの根源的価値として、社会正義や人権に加えて、文化的な承認や文化的市民権の確立を必要としている社会的マイノリティと主流社会との社会的結束を促進することが定義されたことである。

ソーシャルワーク理論研究においても、伝統的な社会正義の言説である財の「配分の正義」という経済的な支援に加えて、多様なマイノリティによるアイデンティティ、文化、言語を尊重する「承認の正義」という文化的な市民権の議論が必要であることが認識されるようになってきている(Funaki 2011; 児島 2013)。ソーシャルワーク研究分野で、コミュニティ文化開発、アート、デジタルメディアの活用についての研究は数少なく、今後の

学際的な共同研究の蓄積が待たれるところである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Shinsuke Funaki, Shoichi Fujita, Kazunori Taiencho, Creating community engagements between people with disability and the local community through digital storytelling, IAFOR Journal of Cultural Studies, 査読有、1、1、2015、60-69
<http://iafor.org/wp-content/uploads/2016/01/6-Creating-Community-Engagements-between-People-with-Disability-and-the-Local-Community-through-Digital-Storytelling.pdf>

舟木紳介、ソーシャルワーク実践(社会福祉実践)におけるデジタルメディアの活用、メディアと社会、査読なし、7、2015、104-111
<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/handle/2237/22899>

Shinsuke Funaki, The Diversity Digital Media Project: Engaging Migrant Youth in Japan through Creative Practice, The Japan Social Innovation Journal, 査読有、1、4、2014 1、9-19
<http://ci.nii.ac.jp/naid/130004628513>

[学会発表](計4件)

Shinsuke Funaki, Promoting cultural citizenship with migrant youth in Japan through digital storytelling workshops, 19th International Consortium for Social Development (ICSD) International Symposium, Singapore, 2015年7月8日

舟木紳介、ソーシャルワーク実践(社会福祉実践)におけるデジタルメディアの活用「国際シンポジウム デジタル・ストーリーテリングの可能性-つながりを構築するメディア実践の未来」、名古屋大学(愛知県名古屋市) 2014年11月30日

Shinsuke Funaki, Peace project: engaging migrant youth for the local community in Japan through making a film, The Fourth Asian Conference on Media and Mass Communication, Osaka, Japan, 2014年10月10日

Shinsuke Funaki, Community cultural development through digital media production in Australia - Case studies of community arts projects with migrants

and refugees in Western Sydney, 2014 International Conference of the Australian Studies Association of Japan, Tokyo, Japan, 2014年7月24日

6. 研究組織

(1)研究代表者

舟木 紳介 (FUNAKI, Shinsuke)
福井県立大学・看護福祉学部・講師
研究者番号：50315842

(3)連携研究者

濱野 健 (HAMANO, Takeshi)
北九州市立大学・文学部・准教授
研究者番号：40620985

塩原 良和 (SHIOBARA, Yoshikazu)

慶應義塾大学・法学部・教授
研究者番号：80411693